九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

古代語法存疑(その二): 久語法について

福田, 良輔

https://doi.org/10.15017/2332895

出版情報:文學研究. 50, pp.31-41, 1954-12-25. 九州文学会

バージョン: 権利関係:

語 法 存 疑 (その二)

久語法について----

上一段 miru (見)		上二段 sugu (過)	四 段 nagel	動詞終	た形になつてゐる。	形上の音形式では、活用語の活用形に「く」又は「らく」が付い	つて、奈良時代において最もその盛行を見た語法形式である。外	語法は、又江戸時代から加行延言とも呼ばれてゐる語法形式であ	たので、久語法一般について考察を試みよう。いふまでもなく久	前稿の終りで、奈良時代の形容詞における久語法について触れ	_			
	(E	(通)	nageku (歎)	置炭		用語の活用形	て最もその成	り加行延言と	ついて考察な	時代の形容詞				,
miru	omofoyuru	suguru	nageku	連体形		ルに「く」又は	盛行を見た 語出	こも呼ばれてる	を試みよう。い	門における久野				グ言語じ
miraku	omofoyuraku	suguraku	nagekaku			「らく」が付い	(形式である。外	る語法形式であ	いふまでもなく久	光について触れ				グ言注じてして
		形容調	不規則					茶後		下二段				
•	fasi (愛)		ki (過去)	bekari	nari	keri	ri (存在態)	nu (完了)	simu (使役	tu (存在態)	mu (推量)	福	-	
sigeki	fasiki * fasike		si	bekaru	naru	keru	ru	nuru) simuru	turu	mu	田良		
	fasikeku		siku	bekaraku	naraku	keraku	raku	muraku	simurak	turaku	maku	輔		

ku (米)

suru kuru

suraku kuraku

(「國語國文」第11卷9号・岡田希雄氏「久語法の接続に

sigesi(繫)

sigeki * sigeke

segekeku

りゃて(上)」参照)

「く」又は「らく」が付いたものと云ふことができる。即ち、「く」 右の表によれば、外形的音形式上からは、活用語の活用形に

* ë

nu (否定)

nn

naku (ni)

ari (有 su (海)

aru

araku

段・カ変・サ変・ナ変の終止形、上一段の未然形に付いてゐる。助動詞「き」には連体形に付き、「らく」の方は、上二段・下二は四・ラ変の未然形及び形容詞の未然形の古形に付き、不規則の

単に外形的形式上からばかりでなく、音形式を離れては文法は単に外形的形式上からばかりでなく、音形式を離れては文法は無い。したがつて、奈良時代のひとびとが久語法を実践する場は無い。したがつて、奈良時代のひとびとが久語法を実践する場は無い。したがつて、奈良時代のひとびとが久語法を実践する場でもない。したがつて、奈良時代の外語法という語したりする人でもない。したがつて、奈良時代の外語法としては、前に述べたでもない。したがつて、奈良時代の外語法としては、前に述べたでもない。したがつて、奈良時代の外語とが入語法を実践する場は無い。

浴したのである。

しかしながら、久語法の成立過程とその語法論とはおのづからしかしながら、久語法の成立過程とその語法論とはおのづから。本稿においては、奈良時代の久語法が「く」及び「らく」きる。本稿においては、奈良時代の久語法が「く」及び「らく」きる。本稿においては、奈良時代の久語法が「く」及び「らく」の音形式によつて、活用語の活用形に接続するやうになつた過程の音形式によって、活用語の活用形に接続するやうになつた過程の音形式によって、活用語の活用形に接続するやうになつた過程の音形式によって、活用語の活用形に接続するやうになつた過程の音形式によって、活用語の活用形に接続するやうになつた過程の音形式によって、活用語の活用形に接続するやうになつた過程とないである。

_

式の変化であると云ふことになる。本語における音節結合や母音交替等の習性に基づいて生じた音形結論を云へば、活用語の連体形に「く」が付いた形が、古代日

奈良時代人の言語意識中には、接尾語「く」及び「らく」は、 おのおの一語として意識されてゐたであらう。本論文においては、 おのおの一語として意識されてゐたであらう。本論文においては、 おのおの一語として意識されてゐたであらう。本論文においては、 誤解を避け論述の正確を期するため、「山高み」「子ら」の「み」 誤解を避け論述の正確を期するため、「山高み」「子ら」の「み」 誤解を避け論述の正確を期するため、「山高み」「子ら」の「み」 にく」「らく」の成立過程がどのやうなものであるにせよ、奈良 時代人の脳中には、それぞれ一個の接尾語として意識されてゐた と思はれる

1577コ 〇 〇 モシルクア ヘルキョカモ 万葉集 巻八

天皇が、昭 之久(続紀一四韶) 朕ススラッコトノノリタマと〇〇 (続紀一四韶) ド

爾ニノリ

告めてヒ

之⁰ 久⁰

(続紀二十七韶) 然之事奏 之ゑ(続紀二十八韶) シカシ ガマラシのの

朕我 天乃 御 門 帝 皇我 御 命 以 天 勅 これ (続紀四十 by ガアメノ ボカドスメ ラガ オポッコトゼチディリタマセ O O

五韶)

等の例やその他の例において、過去の助動詞「き」の連体形「し」に付く「く」の用法の中に、却つてこの事象の本質が秘んであるに付く「く」の用法の中に、対ってこの事象の本質が移在してゐたことを示してゐると見るのが至当である。かりに「ら尾語であることを示してゐると見るのが至当である。かりに「ら尾話である」などの接尾語があつたとしても――事実はさうでないことは後に述べる――、「らく」「あく」などの接尾語の構成を表れば問題は無いが、例外を認めるには例外が生じた理由を外とすれば問題は無いが、例外を認めるには例外が生じた理由を外とすれば問題は無いが、例外を認めるには例外が生じた理由をが存在してゐたことをしばしば経験したわれわれは、連体形「し」が存在してゐたことをしばしば経験したわれわれは、連体形「し」が存在してゐたことをしばしば経験したわれわれは、連体形「し」が存在してゐたことをしばしば経験したわれわれば、連体形「し」の連体形「し」等の例やその他の例において、過去の助動詞「き」の連体形「し」に付く「く」の用法の中に、却つてこの事象の本質が秘んでゐるのはないかと疑はざるを得ないのである。

形容詞の場合は前稿で一応説いたので、今は省略することにし 形容詞の場合は前稿で一応説いたので、今は省略することにしてある。したがつて、連体形の語尾が「る」が現れてあるとは同じである。したがつて、連体形の語尾が「る」が現れてあるが、連体形の语用語にに「る」が現れてあるとは同じである。したがつて、連体形の語尾が「る」とは成立過程を異にしてあるが、連体形の活用語に「る」が現れてあることは同じである。したがつて、連体形の語尾が「る」が現れてあることは同じである。したがつて、連体形の語尾が「る」が付いてある。

しかして、「く」に体言的接尾語の機能があることは、連体形

に付くことから略推量されるが、なほこれまで多くの人によつてに付くことから略推量されるが、なほこれまで多くの人によつて表現された音韻変化の結果とができる。また、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れる活用とができる。また、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れる活用とができる。また、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れる活用とができる。また、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れる活用とができる。また、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れる活用とができる。また、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れる活用とができる。

=

に統一的に付いたものと見るのが自然である。発生の当初から全た統一的に付いたものと見るのが自然である。発生の当初から全地、動詞型の活用語では、「く」は四段・ラ変の未然形と助動うに、動詞型の活用語では、「く」は、活用形式の相異によつて接続を異にし、しかも「く」「らく」は、活用形式の相異によつて接ら、前述の如く、「く」「らく」は、活用形式の相異によつて接ら、前述の如く、「く」「らく」は、活用形式の相異によつて接ら、前述の如く、「く」「らく」は、活用形式の相異によつて接い、前述の如く、「く」「らく」はに異なる二つの活用形に接続する如き不統一は、成立過程において生じたのであらう。語法は本質的に統一性を求めることから考へれば、その発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。発生の当初から全地がである。

く同じ機能を有する「く」「らく」が共存してゐたと考へること

化して、二つの接尾語として現れたものと思はれる。的なものが、音韻的に、語法的に、又はそのいづれかにおいて変らのやうに考へると、奈良時代の「く」「らく」は、本来一元も、言語記号としての語の性質上、無理があらう。

として共時的に意識されるに至つた過程を考察したい。として共時的に意識されるに至つた過程を考察していることが想定される。音形式の上では、「ら」と本標成する「く」とは同じであることが、必ずしも意味や機能が同じであることを意味しない。したがつて、「らく」の成立過程を考察し、「ら」及び「く」の本来の性質を明らかにすることが必要である。「らく」の「ら」に活用語尾の 連形的機能が 寓されて ゐることが 予想されることに活用語尾の 連形的機能が 寓されて ゐることが 予想されることに活用語尾の 連形的機能が 寓されて ゐることが 予想されることに活用語尾の本来の性質を正確に把握すると共に、「らく」の「ら」といふ音形式をとり、奈良時代「く」と共に全く同じ機能の一つの接尾語形式をとり、奈良時代「く」と共に全く同じ機能の一つの接尾語形式をとり、奈良時代「く」と共に全く同じ機能の一つの接尾語形式をとり、奈良時代「く」と共に全く同じ機能の一つの接尾語形式をとり、奈良時代「く」と共に全く同じ機能の一つの接尾語形式の上にいる。

い。節約するために、前記の岡田希雄の好論文に譲ることにした面を節約するために、前記の岡田希雄の好論文に譲ることにしたわたくしなりの考へを述べることとし、諸説の詳細な紹介は、紙にその「ら」についての従来の諸説中重なものに言及し批判してたれには、先づ本稿の論述上必要な限りにおいて、「らく」特

聴すべき説をいち早く述べてをられる。(a)すべての活用語の連岡倉氏は論文中に従来の延言説の不合理性を批判し、次の如き傾号に掲載された岡倉由三郎氏の『語尾のくに就いて』であらう。文は、明治三十三年二月に創刊された「言語学雑誌」第一巻第一文は、明治三十三年二月に創刊された「言語学雑誌」第一巻第一

られる(「岡倉氏の語学上の二論文を読みて所見を述ぶ」られる(「國学院雜誌」明治三十三年六月九両月号所載

したがつて「く」「らく」の用法には形容詞の副詞形及び形容詞詞的なものではなく、形容詞の「く」と全く同一のものと見られ、

岡倉氏の説に反対された岡沢鉦次郎氏は、久語法の「く」を名

の連用形の仮体言(名詞形)と同じ二つの用法があると述べてを

体形の語尾に名詞形を作るための語尾(接尾語)「く」が添はつなできたものであること、(c)「く」は用言を名詞化するが純然たも同じ現象であること、(c)「く」は用言を名詞化するが純然たる名詞ではなく、英文法の動作状名詞(gerund)の類であり、「こと」を意味する朝鮮語の kot と同語源から出てゐるらしく事を意味する朝鮮語の kot と同語源から出てゐるらしく事を意味する語尾(接尾語)と解されたこと、(b)現在においてさへ「思ほへりしくし」「玉ひりひしく」等の如く、助動詞「き」の連体形「し」に「く」が付く用法を唯一の例外と認める有力な説があるものを例外とせず、一つの例外も認められなかつたこと。

説を今少しく具体的に考察して実証したいと思ふ。 以上の如き岡倉氏の説は、論証上の不備があるにしても、その以上の如き岡倉氏の説は、論証上の不備があるにしても、その説を今りに正しい卓見であると、まであらう。筆者は岡倉氏の説の要旨に養意を表すると共に、をなすものであつて、この説を考慮しないで新説を出すことは無をなすものであつて、この説を考慮しないで新説を出すことは無をなすものであつて、この説を考慮しないで新説を出すことは無をなすものであって、この説を考慮していと思ふ。

ある。 ながら、語源的には同語から出たものではないかと思はれるのでながら、語源的には同語から出たものではないかと思はれるのでと形容詞の「く」とは明らかにその機能を異にしてゐる。しかし氏の説が妥当を欠くことは今更いふまでもない。久語法の「く」

を以て場所を示するのとし、慣用の久しきにつれて種々の意義用で以て場所を示するのとし、慣用の久しきにつれて種々の意義用では深く考察されなかつたやうである。ただ山田博士が『「く」のある。山田博士は、「く」「らく」の接続関係の成立過程についある。山田博士は、「く」「らく」の接続関係の成立過程についある。山田博士は、「く」は朝鮮語の ki・köi・khôi と語源を金沢庄三郎博士は、「く」は朝鮮語の ki・köi・khôi と語源を金沢庄三郎博士は、「く」は朝鮮語の ki・köi・khôi と語源を

ただ助動詞「き」の連体形「し」に「く」が付くものだけを例外べき」(土佐日記)の如き傍例があるから、例外ではないとされ、「のめ」「見べし」「見とも」「煮らしも」(以上、万葉集)、「似らめ」「見べし」「見とも」「煮らしも」(以上、万葉集)、「似らめ」「見べし」「見とも」「煮らしも」(以上、万葉集)、「似らめ」「見べし」「見られるが、上一段の動き、四段・ラ変以外の活用語には「く」が終止形に付いたものを藤正次先生は、四段・ラ変の活用語には「く」が未然形に付安藤正次先生は、四段・ラ変の活用語には「く」が未然形に付

須具里、この川の下にも長く汝が心待て(万葉巻十三・三三〇とかり、万葉巻十八・四〇八二) り(万葉巻十八・四〇八二) で、まりかみのよち子をすぎ、橋の末枝をり、万葉巻十八・四〇八二)

すものであつたとはいへない。それはむしろ逆であつて、

る用例もあるのである。だからといつて、「く」が本来場所を示で、そのため、前後の文意によつて、場所を示すやうに解せられ詞が付いたものを対象化して意識したことを表はすことにあるの

佐伯梅友氏は、

の本質的機能から生じた一つの現象であると考へられる。

らう。

法を呈するに至れるものと』見られたのは、いかがなものであ

「く」の機能は、「く」が付いた上の用言又は動詞に助動

く)、 「過ぐり」は上一段「過ぐ」の一種の連用形と見られ、 「過ぐり」は上一段「過ぐ」の一種の連用形と見られ、

九

すら

すり

する

すれ

(b) 過ぐら 過ぐり 過ぐる 過ぐれ

の如く、本来のa系と第二次的語尾をとつたb系とが混合して、の如く、本来のa系と第二次的語尾をとったb系とが混合して、のであらうか。

いて」 が連続しても音韻に変化が生じないのを例外としなくてはならな が付いく場合、i十aがeとならないで、「しく」とあつて母音 である。ただし、この説も助動詞「き」の連体形「し」に aku ことによと、i十aが音韻変化を生じてeとなつた現象と見る説 合は、その連体形の語尾のiと aku のaとの二母音が連続する ので、前の狭母音のロが脱落して生じた現象であり、形容詞の場 の場合は、連体形の語尾のuと aku のaとの二母音が連続する 「こと」を意味する aku といふ形式名詞が付いて、動詞 雄氏「久語法の接続に就いて(上)」の中に見えてをり、金田 とであるが、昭和十六年三月二十一日に脱稿された前記の岡田希 博士が昭和十七年に東京大学における講義中に述べられたとのこ 論文「日本語の動詞の活用形 いところに、この説の弱点の一つがある。この説は、大野晋氏の 最後にこの 頃強力に主張されてゐる 説は、 活用語 (和二八年六月号所載)の二節の註五によれば、(「國語と國文学」昭)の二節の註五によれば、 「日本語の動詞の活用形の起源につ 金田一京助 の連体形に 助動詞

> かにしてゐないことを遺憾とする。 人が他にあつたとも考へられる。筆者は未だその辺の事情を明ら博士の創見とも思はれるが、また前後して同じ考へを抱いてゐた

「あく (aku)」は、合理的にうまく処理できる説ではあるが、「あく (aku)」は、合理的にうまくがこうに、大きな疑問が残つてゐる。また、他の例外許容者の多くがさうであつた如く、そのないところに、他の例外許容者の多くがさうであつた如く、そのないところに、他の例外許容者の多くがさうであつた如く、そのないところに、他の例外許容者の多くがさうであつた如く、そのないところに、大きな疑いふ形式名詞の存在を認めなくてはならないところに、大きな疑いふ形式名詞の存在を認めなくてはならないところに、大きな疑いふ形式名詞の存在を認めなくてはならないところに、大きな疑いふ形式名詞の存在を認めなくてはならないところに、大きな疑い。

例外なく付いて名詞形を作つてゐる、(b)ウ列音では終はる連体 人がないことに物足りなさを感ずるのである。 れる。そして、今日まで岡田希雄氏以外には岡倉氏の説を顧みる は当然「らく」となる、 に転じたもので、したがつて「る」で終はる連体形に付いた場合 形に「く」が付く場合、ウ音の重複を避けて連体形のウ音がア音 の説の最も主要な点は、(a)「く」はすべての活用語の連 がその要旨において正しいことを明らかにしたいと思ふ。 の実証的面において欠くるところを幾分なりとも補つて、 由三郎氏以外は、決まつて助動詞「き」 が実証的に論証されなくては(a)の事項も成立しない。 「く」を例外とされてゐるところに再考の余地があるやうに思は 以上は、久語法に関する重な説を瞥見したに過ぎないが、 の二事項である。 の連体形 「し」に付く しかして、 筆者は岡倉氏の説 (b)の事項 岡倉氏 氏の説 体形に 岡

いて新に派生語の用言を造る場合、「す」「る」の直前にあらはいて新に派生語の用言を造る場合、「す」「る」「し」が動詞に付する。有坂博士によれば、接尾辞「す」「る」「し」が動詞に付らはれる一種の母音交替について」があるので、恩借することとらはれる一種の母音交替について」があるので、恩借することとらはれる一種の母音交替について」があるので、恩借することとらはれる一種の母音交替について、活用語、主として用言に助動詞・接さて、古代国語において、活用語、主として用言に助動詞・接

尾辞

DI C B

「す」が付いて動詞を造る場合

引語を

のに

れる音は、

	С	В	A		7	E	D	С	В	A		-
	四段	下二段	四		るこが	上一	上二段	四段	下二段	四		Ľ
!	四段下二段両用	段	段		「る」が付いて動詞を造る場合	段	段	四段下二段両用	段	段		ここの方付し、重言で式に基づ
	両用			ア	動詞を			両用			7	A THIS VIEW
	6	9	5	ア列	で造る場			3	11	10	ア列	ì
		. 1	1	イ 列	場合	2			1		イ 列	1
				ウ							ゥ 列	
			1	ウ 列			2				列	
	2		2	オ 列			5	1		2	オ 列	
	8	10	9	計		2	7	4	12	12	計	
								· /	る。 ~	ミくても	5 号	易分
	第三則ァ				第二則・ウ	; !	身 一 貝	ちょう	る音節吉合これ	くておうてるこ	が行 その直首	; ;
5	別ア	り	節しの	j す	· 内	l ∃	_ 凡 上 日	u t V	コイス	5 4	が直	ノ I f f

						7	列		٠,	イ列	٠.		ウ列	. 7 U		オ列	列		計	ні	
71	四		段				2										4		. 6		
כנ	下	=	段				5												5		
C	上	上二段	段				1			1			2	4		_	2		6		
1	以上、動詞に接尾語が付いて新に派生語の用言を造る場合、接	動	K	接	異	前が	祔	V	がた	を	派	生	語の	用	誉	を	造	色	合	"	接
0	Hの直前に現れる音は、ア列音が最も多く、	刑	現	れ	る	日	100	ア	烈	おが	最	Þ	多	1	動	動詞の場合には殊	の	场	V.	は	殊
9	ての傾向が強い。したがつて、接尾語「く」が付く場合、直前	同が	強	V	1	ナー	が	2	7	挟	尾	語	7	\perp	から	付	<u> </u>	場合	Ц	直	新
E	『にア列音が現れてゐるのも接尾辞「す」「る」が付いて派生	列立	が	現	れ	み	る	の	₽ Fixe	女星	辞	$\overline{}$	3		る	Ľ.	が	打	7	派	4
浩	造る場合と同じく、古代国語における音節結合上の習性に変	場合	٤	同	ŗ	1	古	代	其	HII N	**	け	る立	節	結	合	上	羽	性	定	牽
れ	た	たことが一つの契機となつたと考へられる。接尾辞が付く	が	_	5	恝	機	٤	75	<i>†</i> -	٤	考	<u>^</u>	Ы Н.	る	0	酱	用 莊	が	付	₹.
П,	ロ、その直前にア列音が現れる傾向は奈良時代に至つて一層論	の古	崩	K	ア	21	が	現	れて	個	向	は	给	及曲	代	K	至	7	_	層	鯳
崩	上用するやうになつたと思はれる。この事は有坂秀世博士が述	る	5	ĸ	2	ナー	کے	思	は	れる	0	ے	かの	掛け	有	坂	秀	画	十	が	述
な	てをられることにも徴される。有坂博士は、上代国語に存在す	れる	ځ	と	K	も巻	3	れ	る。	右	坂	博	土	14	上	代	国	甜	た左	差	7
新	節洁合こよ、	台	ぇ	•																	

に共存することが無い。 第一則 甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位内

節の結合単位に於て、そのオ列音は乙類のものではあすることが少い。就中ウ列音とオ列音とから成る二音一則 ウ列言と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存

り得ない。

コヤル(臥)、トバス(飛)、トマル(留)等のコ・トは乙類であの三つの法則が存在することを発見された。第三則に基づいて、ることが少い。 第三則 ア列音と乙類のオ列音とは、同結合単位内に共存す

るから、ヤ・バ・マ等のア列音とは同一結会単位内に共存するこ

「し」が付いて形容詞を造る場合

活用未詳

下二段上二段(?)両用

D

上二段

2

1 1

1 3

1

生語を造る場合、「す」「る」の直前に現れる音は、音節結合の法韻史の研究」一〇八頁〉。 換言すれば、「す」「る」 が付いて派結合の法則」「國語音)。 換言すれば、「す」「る」 が付いて派とが難しいのにかかはらず共存してゐるのは、接尾辞「す」「る」とが難しいのにかかはらず共存してゐるのは、接尾辞「す」「る」とが難しいのにかかはらず共存してゐるのは、接尾辞「す」「る」

則までも無視してア列音をとる時代があつたといふことである。

また、有坂博士は助動詞「す」「ふ」「ゆ」等が動詞の活用語 を構成する音の母音の性質や活用形式の相異等によつて、接尾辞 や助動詞の直前の音には、ア列音をとることが優勢だって、類推により生じた新しい形であらうと述べてをられたものが多いと推定されてゐる。そしてキュス(聞)とキカス、オモホュ(思)とオモハニのやうに両形があるのは、オ列音の治者が古形で、ア列音の後者は、ア列音をとる接続が支配的になつて来たので、類推により生じた新しい形であらうと述べてをられる。この推定は正しいと考へられる。はじめのうちは、原動詞の語幹を構成する音の母音の性質や活用形式の相異等によつて、接尾辞や助動詞の直前の音には、ア列音をとる接続が支配的になつて来たので、類推により生じた新しい形であらうと述べてをられる。この推定は正しいと考へられる。はじめのうちは、原動詞の語幹を構成する音の母音の性質や活用形式の相異等によつて、接尾辞や助動詞の直前の音には、ア列音をとることが優勢になり、遂に支配的勢力を得るに至つて、音節結合の法則までも無なり、遂に支配的勢力を得るに至つて、音節結合の法則までも無なり、遂に支配的勢力を得るに至つて、音節結合の法則までも無なり、変に支配といる。

π

古代国講の音節結合上の習性に牽引されたものであることは、す一接尾語「く」が付く場合、その直前の音がア列音をとるのは、

た用法ではないかと思はれるのである。接尾辞「す」「る」などた用法ではないかと思はれるのである。接尾辞や助動詞が付く場合は、例外なくア列音をとるので、接尾辞や助動詞が付く場合は、例外なくア列音をとるので、接尾辞や助動詞が付く場合は、例外なくア列音をとるので、接尾辞や助動詞が付く場合に、接続上の一つの音形式としてで、接尾辞や助動詞が付く場合に、接続上の一つの音形式としてで、接尾辞や助動詞が付く場合に、接続上の一つの音形式としてで、接尾辞や助動詞が付く場合に、接続上の一つの音形式としての、接尾辞や助動詞が表した用法に、方は、の場合においては、すでに見たやうに、ア列音が現でに述べた。しかしながら、接尾語「す」「る」、助動詞「す」でに述べた。しかしながら、接尾語「す」「る」、助動詞「す」でに述べた。しかしながら、接尾語「す」「る」、助動詞「す」でに述べた。しかしながら、接尾語「す」「る」、助動詞「す」

よりは後に発生した用法ではないかと思はれる。

化したものであることは明らかである。したがつて、「らゆ」「ら ゐることにより、
 音韻変化したのであることはすでに述べた。なほ、附言すれば、 上は同じ構成関係に立つものと見てよい。しかして、「らく」の ゆ」の「ら」、「らる」の「ら」、「さす」の「さ」等は、語構成 点で同じ関係に立つてゐる。したがつて、「らく」の「ら」、「ら 多少の出入はあつても、大体四段・ナ変・ラ変以外の動詞に付く ナ変・ラ変に、「らく」「らゆ」「らる」「さす」は語によつて つものと考へられる。「く」「ゆ」「る」「す」はいづれも四段 に付き、 「ら」は、 「く」は形式体言であり、「く」は助動詞「き」の連体形「し」 「る」と「らる」、「す」と「さす」との関係と略同じ関係に立 更に、「く」と「らく」との関係は、助動詞「ゆ」と「らゆ」、 連体形の語尾が「る」で終はる活用語に「らく」付いて 動詞及び動詞型活用形を有する助動詞の連体形のロが 「らく」の「ら」は連体形の活用語尾のロが変

てあたといふ説に対する疑問についてはすでに述べたが、更に一てあたといふ説に対する疑問についてはすでに述べたが、更に一だとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といふ形式体言(名詞)が存在したとすると、「あく(aku)」といる形式体言(名詞)が存在したといふ説に対する疑問についてはすでに述べたが、更に一てるたといふ説に対すると、「おり」といる形式体言(名詞)が存在したといふ説に対するといる。

7

層「あく(aku)」の存在が危まれてくる。

成立論的には、「らく」の「ら」が活用語尾であり、決して「ら」成立論的には、「らく」の「ら」が活用語尾であり、決して「ら」の音aが下の「く」と共に語構成上同一単位を構成してゐるととからも、論証されるのである。即ち、(1) 工列——下列、(2) イ列—— す列の三種の母音交替は、名詞的語根にも動詞ウ列、(3) イ列—— す列の三種の母音交替は、名詞的語根にも動詞的語根にも等しく現れ、両者における交替の条件に共通点が見られる。

名詞的語根の場合には

a) その語根が単語の末尾にあらはれる場合には、エ列又は

イ列に終る形が用あられる。例へば、サケ(酒) ッキ

(月) キ(木)

キ(酒杯) ツクコ(月夜) コタチ(木立) て一つの熟語を成す時にのみ用ゐられる。例へば、サカヅ 的 ア列ウ列オ列に終る形は、必ずその後に他の語根がつい

動詞的語根の場合には、

合には、エ列又はイ列に終る形が用ゐられる。例へば、アa その語根が(連用形として)単語の末尾にあらはれる場

ケ(明) ツキ(尽) オキ(起)

一つの派生語を作る時にのみ用ゐられる。例へば、アカスb ア列ウ列オ列に終る形は、必ずその後に接尾辞がついて

a エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合もに用即ち、名詞的語根と動詞的語根との場合の共通点を求めれば、

(明) ツクス(尽) オコス(起)

いて一語る作る場合のみ用ゐられるものである。 (b) ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がつ。 ゐられ得るものであり、

(以上、有坂博士「國語音韻史の研究」四八・九頁参照)

てこれらの連体形を動詞的語根(語幹)の位置に立たせて、それ動詞型活用形の連体形が「る」で終はつてゐる語である。さうしいでかのやうに考へることができる。「らく」の形が現れるのはがいづれもaとなつてゐるのは、前記の法則(b)が現れたものと詞「き」の連体形「し」に付く場合の外は、「く」の直前の母音詞できる。動詞型活用語に接尾語「く」が付く場合、助動ると考へられる。動詞型活用語に接尾語「く」が付く場合、助動ると考へられる。動詞型活用語に接尾語「く」が付く場合、助動ると考へられている。

以上の如く動詞型活用語においては、「く」が付くことにより連

がいづれもア列音(a)に交替したものと見

がaに交替したものと考へられる。念のため事例を示せば、がaに交替したものと考へることができる。終止形と連体形とが「ら」となつたものと考へることができる。終止形と連体形とが「ら」となつたものと考へることができる。終止形と連体形とが「ら」となったものと考へることができる。終止形と連体形とが「ら」となったものと考へることができる。終止形と連体形とが「ら」となったものと考へることができる。終止形と連体形とが「ら」となったものと考へられる。念のため事例を示せば、語彙の「る」に「く」を付けることにより、法則(b)が作用して、語尾の「る」に「く」を付けることにより、法則(b)が作用して、語尾の「る」に「く」を付けることにより、法則(b)が作用して、語尾の「る」

本形のウ列音 (υ)

動調

型 下二四(上二段(連体) 動 焩 有る 寝る 来る 退る 恐るる 過べる 参るる ななる Mg (連体) furu+ku>furaku kiku+ku>kikaku nuru+ku>nuraku suru+ku>suraku ösöruru+ku>ösöruraku aru+ku>araku kuru+ku>kuraku miru+ku>miraku suguru+ku>suguraku sımuru+ku>simuraku turu+ku>turaku keru+ku>keraku nuru+ku>muraku

kemu+ku>kemaku nu+ku>naku mu+ku>maku

(b)が作用して「なく」となつたことが分る。「なくに」は、連体形「ぬ」に「く」が付くことにより、 法則用する否定の 助動詞 があつたことは 確実視 されるが、「なく」いふまでもなく誤である。また、古くは「な・に・ぬ・ね」と活いたがつて、「まく」を「まし」の活用形の未然形とする説はしたがつて、「まく」を「まし」の活用形の未然形とする説は

こす(起)」「つくす(尽)」などのやうに、ウ列音(ロ)、オ列 ある。しかしながら、「まさる(増)」「わかる(分)」の「る」、 と考へられる。そして動詞型活用語に「く」が付く場合、 で)になるのは、動詞的語根(語幹)に現れてゐる母音の性質と 勢である。そして、既に述べたやうにウ列音(ロ)・オ列音 音(o・ⅰ)となるものがあるが、ア列音(a)になるものが優 つて、この場合、接尾辞と接尾語との相異は、考慮に入れなくて 直前に同じくア列音(a)が現れることには変りはない。したが し、「うたる(打)」「なげかる(嘆)」の「る」、「ゆかす(行)」 語「く」が付いた場合にも法則(b)が作用するかどうかが問題で 接尾辞「る」「す」の母音uとの音声的関係に基づくものが多 よいと考えられる。もつとも、「る」「す」が付く場合、ア列音 「のらす(告)」の「す」が助動詞であつても、「る」「す」の 「あかす(明)」「くらす(暮)」の「す」が接尾辞であるのに対 (寄)」「わぶる(佗)」「くるほす(狂)」「わしす(走)」「お (a)とならないで、「くくる(潜)」「しきる(頻)」「よそる 法則(b)は接尾辞が付いて派生語を作る場合であるので、接尾 助動詞 ·

動詞「つ」「ぬ」(完了)「む」「ぬ(否定)」「けり」等の連体 幹)に付いて派生語を作るのに対し、接尾語「く」は、動詞の連 ためではないかと思はれる。接尾辞「る」「す」が動詞的語根 をとることに絶対的には支配されるやうになつた時代に発生した 的になり、 る。接尾辞「る」「す」が付く場合、後にア列音(a)が圧倒 なつて、久語法は発生し、その盛行を見るに至つたものと思はれ したことを思はしめるのである。すでに述べた如く接、尾辞「る 形を語根(語幹)の位置に立たせて付くことは、久語法が接尾辞 体形を語根 ア列音(a)の類推的勢力により、ア列音(a)化される時代に (ける音節結合の法則」一〇九―一一二頁参照) (「國語音韻史の研究」所收「古代日本語に於)。 「おもはゆ」が生じたことは、 「る」「す」が付いて派生語を作る造語法よりも後の時代に発生 「き」以外は例外なくア列音(a)に付くのは、前にも触れた如 「す」等が付く場合、ア列音(a)の勢力が圧倒的に強くなり、 (又は接尾語)の母音uとの音声的関係よりも、ア列音 久語法が動詞的語根 古形 「きこす」「おもほゆ」の他に所形「きかす」 (語幹)の位置に立たせたものに付くのみならず、助 (語幹) に現れてゐる母音の性質と接尾 有坂博士の お説の通りで あらう (a)

型活用語のすべての連体形に付くといふことができる。がaと交替することによつてより、現れたもので、「く」したがつて、「あく(aku)のa は連体形の語尾母音のに対する考察を混乱に導く結果となつたのである。

は動詞

u

形容詞の活用形に接尾語「く」が付くことについては、本誌第四十八輯においてすでに 述べたところである。 その際、筆者は四十八輯においてすでに 述べたところである。 その際、筆者はしかしながら、「く」「らく」を成立論的に考察すれば、いづれしかしながら、「く」「らく」を成立論的に考察すれば、いづれしかしながら、「く」「らく」が大き詞には 連体形が甲類のこれについては、なほ常はであることは、確かであると思ふ。

٠.

付く場合の外は、連体形であることが見失はれて、久語法の成立と交替したのである。そのため、助動詞「き」の連体形「し」にのに付く場合は、前記の(b)により、ウ列音(u)がア列音(a)形に付いたものであり、連体形がウ列音(u)で終はつてゐるもしたがつて、動詞型の活用語にあつては、「く」はすべて連体